



北区にある映画館「シネマ・チユキ・タバタ」は、視覚・聴覚障害者が鑑賞しやすい工夫が施されている。

昨年9月、映画鑑賞のバリアフリー化に取り組む市民団体「シティ・ライツ」がビルの一室に新設した。全20席の小さな映画館だが、視覚障害者のために全ての席で映像を解説する「音声ガイド」をイヤホンで聞くことができる。聴覚障害者向けには、布でスピーカーをくるみ、音の振動が直接体に伝わる「抱っこスピーカー」も用意している。

記者もアイマスクをして樹木希林さん主演の「あん」を鑑賞したが、ラジオドラマのイメージに近く、自然に情景が頭に浮かび、驚くほど楽しむことができた。

映画館の支配人を務める佐藤浩章さん(27)は「障害者を特別扱いせずに受け入れ、映画という娯楽を気軽に楽しんでもらいたいから、うちは障害者割引を設けていません」と話していた。



芸術鑑賞障害者にも

視覚や聴覚に障害があっても、映画や舞台、美術館を楽しまない。こうした声を受けて、障害者も芸術を堪能できる取り組みが増えている。作品への想像をくまらませ、互いの想像を深め、記者も参加者の言葉を頼りに



「キノのなさを裏したみたいな形」「アサガオの花のような形じゃないかな」目の見える人たちが、展示された陶器の作品について、視覚障害者にイメージがわきやすいように説明する。

記者は9月9日、市立グループ「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」のメンバーや人の視覚障害者とともに、神奈川県民ホール横浜市のギャラリーで開かれた現代美術館「rooms」を、アイマスクをして鑑賞した。

作品は、直径約30センチ、高さ約10センチの円錐を逆さにした形



状で、三角形の板を何枚も円形に並べたもの。目の見える人が形を説明し、障害者らとともに感想を言い合うことで、作品への想像をくまらませ、互いの想像を深め、記者も参加者の言葉を頼りに

美術展 造形詳しく説明 舞台 振動や光で音表現



出演者の言葉がスクリーンに表示されるバリ・アフリカコンサート(7日、さいたま市で)

作品の形状をイメージした。ある参加者が「格好いい感じ」と言うと、視覚障害者の東京都民局・会議員大谷重司さん(58)は「なんで格好いいのかわからない。詳しく教えて」と声を上げた。ほかの参加者からは「なるほど、格好いい感じがわかってき

た気がする」と応じていた。約2時間半の鑑賞を終え、大谷さんは満足した様子で「意見を言い合ったことで、作品に対する固定観念が覆されていく。発想が広がっていくのがおもしろい」



り、曲の合間に話す言葉が表示される。ピアノの演奏中には、曲のイメージに合わせた画像も映し出す。大谷さんの「耳栓をしても演奏はよく聞こえてきたが、視覚的に観客を導く工夫が感じられた」。

また、東京都豊島区の区立「芸術文化センター」にある「さくさく」では昨年12月、ろう者が制作したダンス公演「ノアの海」が上演された。多くのスピーカーやライトを使い、振動や光で音表現する、一風変わった舞台だ。鑑賞した聴覚障害者の同区、白鷺菜菜子(27)さんは「音が音を感じることで、聴くことができない音を感じられた」と手話で感想を表し、満面の笑みを見せた。

北区にある映画館「シネマ・チユキ・タバタ」は、視覚・聴覚障害者が鑑賞しやすい工夫が施されている。

昨年9月、映画鑑賞のバリアフリー化に取り組む市民団体「シティ・ライツ」がビルの一室に新設した。全20席の小さな映画館だが、視覚障害